



外人広報室長の ニッポン透視学

MUHAMMAD RAEES

ムハンマッド・ライース

時事通信社

外人広報室長の ニッポン透視学

MUHAMMAD RAEES

ムハンマッド・ライース

時事通信社

著者紹介

Muhammad Raees (ムハンマッド・ライース)

1943年、インドのウッタール・パルデーシュ州に生まれる。4歳の時、パキスタンへ移住。1957年、外交官の父と共に来日し、都立新宿高校入学。1964年、横浜国立大学工学部応用化学科卒業。その後、東京大学大学院研究生を経て、大企業数社に勤務する。現在、林原株式会社広報企画室室長。著書に、『外人課長のニッポン企業論』(PHP21世紀図書館・PHP刊)がある。

外人広報室長のニッポン透視学

定価1000円

1987年2月10日 発行

著 者 ムハンマッド・ライース

発行者 岡 田 舜 平

発行所 株式会社 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 〒100

電話 東京03(591)1111(大代表) 振替東京4-85000

印刷所 株式会社 太平印刷社

製本所 大口製本印刷株式会社

装 幀 阪 田 啓

校 査 櫛 田 ひろし

©1987 MUHAMMAD RAEES (落丁・乱丁はお取り替えます)

ISBN4-7887-8702-4 C0095

まえがき

ニッポンはアジアの東の端にある。ニッポンの世界地図を見てもわからないが、僕の国パキスタンでは、インド洋が中心で、アメリカ大陸は左の端にくるから、「極東」という感じがよくわかる。その東の端のちっちゃな島国に、僕の父はあこがれた。インドの国鉄に勤めていた彼は、パキスタン分離独立（一九四七年）とともに、故郷を捨て、当時四歳だった僕と妹、それに母を連れて、命からがらパキスタンに逃れた。イスラーム教徒が自由に生きるためにはこうするしか方法がなかったのだ。

父は当然、失業した。そして、苦勞したあげく、外務省に職を見つけた。一九五五年、パキスタンを岸首相が訪問した。それが、僕をニッポンに結びつけたのだ。僕はまだ中学生。ホッケーに情熱をかけるパキスタニー（パキスタン野郎）だった。僕の知らないところで、僕の運命は決まった。父は岸首相のお世話をさせてもらった。そして感動し、ニッポンにあこがれたのだ。「あれだけ偉

い方なのに、謙虚で、おおらかで、腰が低い。ニッポンジンはすばらしい」。彼は、ニッポンこそ自分の子供を教育する場所だと考えた。

だが金はない。それからの彼はまるで別人のように人が変わった。彼は猛勉強して外務省の昇格試験にパスした。かといってすぐニッポンへ行けるわけではない。彼は事あるたびに、実力者に会うたびに、ニッポンへ行きたいと頼んでまわった。誰もがうらやむヨーロッパの任地も断り続けた。そして、一九五七年、彼の希望はかなえられ、僕は、学生服を着てニッポンの高校生になったのだ。それからざっと三十年間、途中、数年の断絶はあるが、僕は高校、大学、サラリーマン、中間管理職と、ニッポンジンのごく普通の生活をしてきたことになる。今では、電話なら、誰もが僕をニッポンジンだと思い込む。こうして本も出版させてもらえるようになった。おじぎもおあいそもかなり要領がよくなった。外国の特派員からニッポンジンについて、いろいろな意見を求められるようにもなった。

ニッポンジンは親切で、勤勉だ。アメリカ人も同じだが、肌合いが違う。そこが僕にはピッタリくるのだ。というのもイスラーム教の道徳とニッポンのそれとは、驚くほど、相通じているところがあるからだ。誠実で、つつしみ深いお年寄りを見ていると、ついつい故国の老人たちと重なってしまう。

だが、一方でニッポンはガイジンに對して、とてつもなく冷たいようにみえる。僕は、納豆もミ

ソ汁もソバもうどんもすしも、何でも食べられる。ハシの使い方もちょっとしたもんだ。しかし、それでも、ニッポンジンは、僕をニッポンジンとは絶対、認めてくれない。顔が違う。肌の色が違う。フ、ン、イ、キ、も違う——みんなそう言う。

ニッポンジンの社会は、あの「銭湯」に全くよく似ている。ルールがあるのだ。他の人の邪魔にならないよう気を配りながら、肌を触れあいながら、静かに入らなくてはならない。当然、肌の色の違いは目立つ。お湯の使い方や、石けんのあわ立て方の違いもすぐわかる。違ふと入りづらい。そこにはバスルームのような「自由」はない。

「窮屈なら、銭湯に入らなきやいいじゃないか」——こんな声が飛んできそうだが、僕は、やっぱり、この「ニッポン湯」が好きなのだ。僕は父を尊敬している。愛している。そして感謝している。その父があこがれたのと同じくらいに、いやそれ以上に、僕はニッポンジンを尊敬し、ニッポンに感謝している。今の僕を僕ならしめたのは、このニッポンなのだ。ニッポンは僕の恩人なのだ。思いつくまま、何のかんのと自由に書かせてもらったが、それも僕のニッポンに対する愛情だと受け取っていただければ、こんなうれしいことはない。

外人広報室長のニッポン透視学

目次

まえがき

ニッポンの親は子供に貸し倒れ

13

高く、おいしいニッポンの「果物」

19

やさしい日本語、むずかしいエーゴ

24

ニッポンジンは忘れ物の名人

30

ニッポン企業と桃太郎

36

「恩」も商品？ ニッポン株式会社

41

セコイ国鉄が「なぜ」赤字？

46

離婚急増は愛情不足が原因

52

出世する人はウソをゴマスリに変える名人

58

大事なもの隠せ

64

マジメ、勤勉がパターン化すれば……

70

お題目好き、ニッポン

75

オー！ 国際化

81

ほどほど文化の国はどこ？

87

値の張るものほどありがたい

93

発見、〃特許シンδροーム〃

98

ニッポン製？「越中ふんどし」

104

所変われば食べ物変わる

111

たてまえを失ったニッポンジン

117

「モドキ」はイヤだ！

123

ガイジンは得？

128

人間も故障する？

133

哀れな、がんばる人

140

いじめの源は「空気病」

146

信頼が誠実を生む

151

大人のケンカができないニッポンジン

157

“ホンブ”が頼り(?)のニッポンジン

163

“ミセス会社”は強引に弱い……?

171

マスコミはこわいヨ

177

ちよつと熱いよ! “ニッポン湯”

185

あとがき

外人広報室長のニッポン透視学

僕を“パキスタン人”に戻そうと苦心している、
いとしいかみさんにささぐ。

ニッポンの親は子供に貸し倒れ

ニッポンジンは計算に強い。アメリカと日本の小学生を比べたら、日本の方がはるかに点数が良くて、アメリカ人をびっくりさせた。僕から見ると、これは当然のことだ。

僕はニューヨークへ出張するたびに、ザ・プラザホテルに滞在する。ここは確かに一流だが、僕は油断しない。チェックアウトする時には、必ずニッポン式暗算で確認することになっている。青い目と金髪の美女に見とれていると、とんでもないお釣りをもらうハメになるからだ。アメリカ人の計算はアテにならないのだ——もっとも、*'Keep the change.'*（釣りはチップだよ）と言った時の計算だけは、ニッポンジン以上に速い、ホント——。

ニッポンジンが得意なのは、何も釣り銭の計算だけではない。教育熱心なニッポンジンの頭の中には、子供にかける夢と情熱、それに得意の計算が立派に両立しているのだ。

仕事柄、僕は毎日いろいろな分野のニッポンジンやガイジンと話をする。ガイジンはまずジョー

クから切り出すと、すぐ打ち解ける。商談もほとんど拍子にいく。ところがニッポンジンはそうはいかない。フマジメだとみられるのだ。何せ、カイシャの代表という顔で来るから堅い。たてまえという鎧をつけているから骨が折れる。ではどうするか――。

子供の話に限る。鎧をとるのに刀はいらぬ、なのだ。なかでも大学受験の話となると、どんな大会社の社長さんであろうが、有名な大学教授であろうが、たちまち打ち解けて、悩みをぶつけるから不思議だ。

僕の会社ではカップリングシュガーという虫歯になりにくい糖を製造している。東京からやって来たある大手商社の部長さんに社内を見てもらい、製品を説明していたら、『虫歯』という言葉が出てきたところでこの人の目が突然輝いた。顔を近付けてくると「じゃあ、おたくは大学の歯学部なんかとはい、いろいろつながりが……」。小さいが熱っぽい声でささやくではないか。僕が答える間もなく、部長さんの話は続いた。

一人息子を有名私立中学にやり、家庭教師をつけ、高校に入ってから塾にも通わせている。そのために、ゴルフは月一回に減らした。飲み代は極力社用で落とした。それも終電に乗り遅れるとタクシー代がかさむから、できるだけ早く切りあげるようにした。家内に買ってやると約束した毛皮のコートも五年間我慢させている。長女は今年が高校受験。二人の教育費は莫大だから、長男はどうしても歯学部に入りたい、と言う。